

第 37 回アンケート結果（抜粋）

一般講演 1：「介護行為に関する知識基盤の構築に向けて 一入浴介助行為における方式の抽出」

1. Q&A の最後でも出ましたが、マニュアルの定義が不明でした。役場向けのマニュアルとは何か、そもそもマニュアルは手順、手続きなどと考えていたが、違うようでした。その点を、もう少し詳しく説明してもらいたかったです。

ご指摘の通り「マニュアル」の定義は述べておりませんでした。ここでは一般的にマニュアルと呼ばれるものという程度の意味で使っておりました。

一方で、「構造化マニュアル」という言葉は、過去の研究をもとに介護分野における行為に関する知識を構造的に記述したものという意味で用い、その具体例として「介護の構造化マニュアルの例」を示しました。

一般名詞としての「マニュアル」と技術用語としての「構造化マニュアル」の使い分けが適当でなかったため混乱を招いたのかもしれませんが。

2. 行為をどのように理解し、捉えるかという部分が非常に興味深かったです。

3. 実用化に向けて、個人の電子カルテの情報をを用いた個別対応は、ツリー構造（分岐）が増えるため大変かと思いますが、より良いサービスにつながるため、ぜひ簡単に構成できる方法を開発していただきたいです。

4. マニュアルを構造化して根拠を明確にしたところが良かったと思いました。

5. 表現の揺れを機能定義で吸収したとのことでしたが、ベースは教科書から作成していたと言っていた気がするのですが、現場によって、そんなに違うのでしょうか？モデル化の視点が参考になりました。

本発表では、現場による違いを吸収したという話ではなく、教科書内であっても同様の意味を異なる言葉で表現している、もしくはどのような意味を表しているのかが明確ではないため、語彙体系を用いました。

ご指摘のように、現場毎の違いについても精査する必要があると考えます。

6. 「構造化マニュアルの例」から入浴介助行為に関する知識の再構造化、部品として分解された再利用の課題について分かりやすいご説明で理解させていただきました。今後の展開として、研究のスコープが異なるかと存じますが、感情表現やその状態変化に関心がございます。

当日の質疑でも、感情表現についてご質問を頂きました。

感情表現については、オントロジー研究の分野でもいくつかの研究がなされており、それらを参照することを考えております。また、認知機能障害等のより介護に特化しておりかつ物理的な状態としては表現がしにくいものに関しては、心理学の専門家と共同で別途研究を進めるつもりでおります。

7. オントロジーの作成が肝であると感じました。①オントロジーの作成は標準化可能でしょうか？ ②他者が作成したオントロジーを利用することは可能でしょうか？ ③本発表で作成したオントロジーの作成コストは、どの程度でしょうか？

①オントロジーの作成方法を標準化可能であるか？と理解しました。

現時点では、標準化は難しいと思います。

オントロジーの作成方法は、過去に多くの研究がありますが、オントロジーで表現したい対象や作成したオントロジーの利用目的に応じて適切な作成方法は異なるものだと感じております。

それらの作成方法を、表現対象や利用目的に応じて整理することは標準化の一助になるのではないかと思います。

②他者が作成したオントロジーを利用することは可能か？

はい、可能です。

今回の発表では、3種類のオントロジーと他の研究成果の知見を参考に知識を構造的に記述しました。

③本発表で作成したオントロジーの作成コストはどの程度か？

正確には計測しておらず、このオントロジーの作成だけに時間を使ったわけではありませんが、期間としては2か月程度です。

8. 構造化マニュアルについて詳しく知りたいです。

構造化マニュアルのモデルについては、原稿中の参考文献[6, 12]をご参照下さい。

介護の構造化マニュアルの例については、原稿中の参考文献[14]および脚注 1 の URL にて公開しているリソースをご参照下さい。

9. 「マニュアルの活用」により注目した研究となると面白いなと感じました。現状のマニュアルはあるが、使われていない、という状態は検索性の悪さと行為からの逆算が難しい点にあると感じました。「構造化」を行うことで、解決できるのか、などを知りたいです。

段階的に解決可能であると考えます。

まず、行為と行為間の関係を分けて「構造化」するという段階です。ここでは、書かれている情報の内、何が行為でその行為はどの行為とどのような関係で結ばれているのか、を計算機が解釈可能となります。マニュアルがこのように構造化されることで、単なるテキストマッチではなく、目的は何か？次に行う行為は何か？というような構造を利用した検索が可能となります。

次に、本発表で行った語彙と視点の統一を行うことにより「構造化」するという段階です。ここでは、使用されている語彙が統一されているため、同一の語彙を用いて表現されている行為を達成するための方式の一覧を取得するような検索が可能になります。この検索は、マニュアルを読むときの検索とは違い、マニュアルを作るときに有用なものと考えます。つまり、異なる目的のもとで使われている方式ではあるが、同様の目的を達成可能であるということを示しているため、方式の再利用が可能となるということです。これによって、マニュアル改訂のコストが高く現状に合わないマニュアルとなっていた現場に対して、マニュアル改訂のコストを下げる方向で貢献することが期待できます。